

第 15 回 日本ジオパーク委員会議事録
日時：2012 年 9 月 24 日（月）13:00～
場所：経済産業省別館 5 階 526 号会議室

出席者

委員長

尾池和夫（委員長） 財団法人 国際高等研究所 所長

副委員長

町田 洋（副委員長） 日本第四紀学会（東京都立大学 名誉教授）

委員(五十音順)

伊藤和明 NPO 法人 防災情報機構 会長
菊地俊夫 日本地理学会（首都大学東京 教授）
小泉武栄 東京学芸大学 教授
阿部宗広 一般財団法人 自然公園財団
高木秀雄 日本地質学会（早稲田大学 教授）
佃 栄吉 産業技術総合研究所地質調査総合センター 代表
中川和之 日本地震学会（時事通信社 山形支局長）
中田節也 日本火山学会（東京大学地震研究所 教授）
成田 賢 全国地質調査業協会連合会 会長

オブザーバー

外務省国際文化協力室	門倉俊明
文部科学省国際統括官付ユネスコ協力官	堀尾多香
文部科学省国際統括官付ユネスコ第 3 係長	中馬 愛
文化庁記念物課主任文化財調査官	桂 雄三
農林水産省林野庁国有林野部経営企画課	柏 智久
経済産業省産業技術環境局知的基盤課	高橋 潔
国土交通省砂防計画課地震火山砂防室	吉松雅行
国土交通省気象庁地震火山部火山課	上野忠良
国土交通省観光庁観光地域振興部観光資源課	池田博司
環境省自然環境局国立公園課	高橋啓介
環境省自然環境局国立公園課	田村省二

事務局

産業技術総合研究所 加藤碩一
産業技術総合研究所 利光誠一
産業技術総合研究所 下川浩一
産業技術総合研究所 渡辺真人

産業技術総合研究所 及川輝樹
産業技術総合研究所 今西和俊
産業技術総合研究所 吉田清香
産業技術総合研究所 菅家亜希子
産業技術総合研究所 濱崎聡志
産業技術総合研究所 吉川敏之

日本ジオパークネットワーク理事長（糸魚川市市長） 米田 徹
日本ジオパークネットワーク 齊藤清一

配付資料

- 資料1 第14回日本ジオパーク委員会議事録（案）
- 資料2 日本ジオパーク審査報告書（5地域：各要約版、詳細版、添付資料）
- 資料3 世界ジオパーク推薦審査報告書（阿蘇地域：詳細版、詳細版）
- 資料4 審査結果記者発表資料
- 資料5 再審査スケジュール（案）

議事内容

開会の挨拶（13:00 - 13:03）

利光事務局長から開会挨拶があり会議が開始された。尾池委員長から、「四年毎に節目があるよう今年で今年で節目を感じる年である。厳しいニュースがあり、再審査も迎えるので実のある議論をお願いしたい」との挨拶があった。

1. 報告事項（13:03-13:30）

資料確認の後、前回議事録承認、JGN 米田理事長からのお礼と要望、南アルプスジオパークの組織変更の報告、EGN 参加報告等があった。

1-1. 前回議事録承認

お気づきの点があったら指摘してほしい。問題がなければ承認。

1-2. JGN 米田理事長からのお礼と要望

JGCのご尽力のおかげで、ジオパークと、ジオパークに関心のある地域が増えた。日本の特徴は変動帯としてのジオであり、その自然の保護・利活用が注目されている。その一方、地方・地域経済の課題に対し変化を求められており、それは自立である。ジオパーク活動においては自立型と依存型（認定が目標となっている地域）がある。自立型では行政任せの態度が変化し、市民と行政が一体化するとともに、むしろ市民が主体となってきている。ふるさとへのほこりと愛着がジオパークの指標と考えている。ジオパーク事業を大切に、日本に広めたい。ただし、世界遺産ほど注目・脚光はない。先駆地域の努力が必要。ジオパーク関連の国際会議への参加等を積極的に行いネット

ワークへの貢献を行い、ジオパークのメリットは自ら見つけることが必要である。委員への御願いとして、自立型の活動をめざし協調できる地域を選んで欲しい。

1-3. EGN 会議報告

中田委員から EGN 会議参加報告。

残念ながら、隠岐ジオパークは今回見送りとなった。6+1 地域が新規ジオパークとなった (Lesvos は地域を島全体に拡大して認定)。新規申請では 8 地域中通過が 3 地域、defer (保留) 4 地域、却下 1 地域であった。19 地域が再審査を受け、イランとオーストラリアはレッドカード、中国 3 地域がイエローカードとなった。中国 3 地域は国際連携に関して弱いことが主に指摘された。

隠岐の問題点 (ヒアリングの結果。正式な文書はまだ未着)は、申請書に足りない情報がある、地域住民の参加や運営の持続性、ジオツーリズムとこれまでの観光との協調、世界ジオパークネットワークへの貢献度、などがあげられた。数ヶ月以内に GGN から文書が届くので、それに返答し、GGN が納得すれば書類審査で通過 (ただし今年の例を見ると再現地審査もあり得る)。隠岐については担当者も決まっている (Ibrahim Komoo と Guy Martini 両氏)。

全体の感想として、GGN の審査基準が厳しくなっている。日本の最初の 3 つは再審査において要注意とも指摘された。審査の時だけよく見せても見抜かれる。普段、普通の人を訪れても魅力あるジオパークであるべき。各国から毎年 2 地域の申請が可能であり、日本からの申請は、来年度、隠岐が 1 地域とカウントされる。

・オーストラリアのレッドカードの理由は?

→国内の国立公園にジオパークの概念が含まれるので、ジオパークから撤退する旨の公式の文書を国としてユネスコに出したとのこと。

1-4. 南アルプス運営組織変更

事務局から資料に基づき経緯を説明。新たにジオパーク協議会を立ち上げること。JGC として了承した。ただ、委員からどのような経緯・理由で行ったのか再審査のときの聞き取り材料としたいとの意見がでた。

2. 討議事項

2-1. 日本ジオパーク審査報告、認定会議 (13:32-15:18)

採点表の点数の集計のみで決めるのではなく、ここでの議論の結果に基づき決定すること、これまで同様各地域の改善すべき課題をまとめて「宿題」を課すことを確認。認定後も積極的に委員会がかかわり、改善点が順調に克服されているかのチェックをより厳密に行っていこうという方針が確認された。

八峰白神

高木委員、阿部委員から現地審査報告があった。

[報告] 白神山地を中心としたストーリーが特徴で、地域が白神山地の恵みを受けていることが強調されていた。隆起について学べ、ブナの重要性 (保水) も理解できる。ジオとエコの関わりもよく見

えてきた。市民の関心も高い。協議会は8団体。青森県側にもジオサイトあり。

課題としてストーリーはもっと明確にした方がよい。利用とのバランスをとった安山岩の露頭保全は必要である。今後はガイドブックの整備、住民参加が必用。ガイドのスキルアップも課題。結論として、認定しても良いレベルには達している印象を持っている。ガイドは工夫しているが専門用語をそのまま使っている例もあった。中心となっている先生の影響が大きいようだ。

[コメント・質疑応答]

- ・白神山地の隆起が売りのひとつだが、海成段丘の形成と山地の形成は時間スケールが違うことには注意して欲しい。「日本の海成段丘アトラス」などを参考にして欲しい。
→今回は八峰町だけで申請するとのことである。しかし、隣接する深浦町との関係は良好で、今後はエリア拡大もあり得る。
- ・ブナをはじめとする植生のストーリーがどの程度できているか、五能線が有効に利用されているか。
→世界遺産の施設では生態が中心。ジオパークのストーリーはまだ展示がない。五能線はスピードを落とす程度。生かせば良くなる。
- ・ブナの保護では先駆地域。青秋林道の勇気ある撤退は語られているのか。
→看板も作る意思はあるそうだ。
- ・林道の終点で記念写真を撮っている例もあるので生かして欲しい。
- ・ジオパーク活動の拠点となる施設はあるのか。
→岩館小学校には推進協議会の事務局がある。津波の教訓を伝える取り組みも行っている。
- ・岩館小学校の整備は十分なのか。
→これからという段階。3つの拠点施設がある。連携が必用。
- ・白神山地の開発が進まなかったメリット（地形・気象）は語られているか。研究者との日常的な連携は続くのか。
→秋田大学の協力が得られている。関心のある研究者もいる。

ゆざわ

菊地委員と中川委員から現地審査報告があった。

[報告] 日本海の拡大から第四紀火山、湖沼堆積物と化石、地すべり、地熱などのストーリーをもつ。興味深いジオサイトが多くあるが、ただし全体のストーリーが希薄と感じた。キャッチフレーズの「美の郷」も曖昧である。ただし、地域組織が自立し、しっかりした活動を行っている。住民活動に定評がある地域で、住民参加ができていた。研究者の関心・住民のやる気などは大きく、今後の発展の可能性がある。ジオサイトの看板や拠点がいないことなどの問題があり、それは今後改善を求めたい。しかし、日本ジオパークとして推薦できるレベルにあると考えられる。なお、「美の郷」の検討内容は資料にあるとおり、学術的にも考えるとのこと。ジオパークの名称には使用しない。栗原地域とも連携する意志がある。宿題は残してきたので、さらに良くなると思う。資金の目処も立っている。

[コメント・質疑応答]

- ・資源が生かせる地域と想うが地元ではどうか。

- 地元なりにストーリーを作る意志はある。銀山の汚染水は小学生にも取り上げられている。
- 地熱はまとまってきている印象。銀山は成因等これから。土地管理者との調整も必要になる。ガイド付きなら入山しても良いようにできれば発展が見込める。
- ・佐竹氏の移封に伴って、茨城の鉱山技術者が秋田に移って鉱山開発が進んだことと、「黒鉱」の語は表出しして欲しい。
- ・水資源の要素も大きい。名水百選もある。お酒の消費量も多く、それも売りになる。→湯沢の水にもジオの理由がある。ただ、全体のストーリーに組み込まれていない。
- ・地名にもあるように地熱をもっと出しても良い。→説明が不足していた。地元では既に地熱を売りだそうとしている。
- ・ストーリー性をどう作るかが大切だが、専門家は協力できるのか。→専門家は関わっていて、専門的には整理されている。ただ、地元で整理が出来ていない。研究者はやや引いている立場。→専門家はシニアが中心。若い血を入れたいという意志がある。

銚子

町田副委員長と尾池委員長から現地審査の報告があった。

[報告] 5月に発表されたテーマ「地層の博物館」の意見に対する回答が資料3にあるのでご覧いただきたい。銚子を「拳」に見立てて説明しており、アイデアとしては評価している。ガイド養成もジオパーク協議会でしている。生煮えのところもあるが熱意は伝わった。看板はこれから整備する。水運も含めていろいろなことが語れる地域であるのでジオパークとしてのポテンシャルは高い地域である。なかなかがんばっているという印象であり、今後伸びる可能性が高い。

[コメント・質疑応答]

- ・5月の意見に対し、銚子の事務局から相談を受けた。問題は解決に向かっているのか。→拠点整備は始まったが、これから。既存の有料拠点は一部無料化しようとしているらしい。全体の方向性は5月からは改善されている。
- ・屏風ヶ浦へのアクセスは。→今は改善されている。途中から降りる箇所については、今回は行かなかった。マネージメントの人員が若いく、まとめ役が必用と感じた。大学の先生が牽引してくれそう。
- ・房総沖地震への備えは。→まだ十分ではない。東日本大震災でも飯岡より津波が低かったため安心してしまった節がある。
- ・屏風ヶ浦を回っている観光客の避難は課題。
- ・岬以外の部分のストーリーはどのようなものがあるのか。→資料にあるので見てほしい。
- ・5月は大学が突出していた印象があったが、それは改善したのか。→今は全体として進んでいる。大学にも引き続き引っ張ってもらえている。

箱根

中田委員と成田委員から現地審査の報告があった

[報告] 富士山を背景に、芦ノ湖等火山の見所、植物、松田断層等ジオの見どころは多い。文化的にも関所、小田原城（地震再建の歴史も）等多くありジオサイトは豊富な地域である。活動は博物館と温泉地学研究所が中心的な役割を担っており、既に観光地なのでガイドも多い。ただし、既存の観光ガイドがジオをどうに理解し解説するかが課題である。ガイドは、シニアのボランティアが多く、ジオの説明はあまりこなれていない印象をもった。土台は出来ている。ふつうの観光案内をジオの発想から伝えることができるかどうかのが課題。カルデラを弁当箱にたとえるガイドもいるので、今後の期待は出来そう。保全は国立公園内であるので問題はない。ただし、1市3町内で温度差がある。活動・安全については十分やっているが、津波対策はやや課題として残る。

[コメント・質疑応答]

- ・箱根ジオパークのビデオは全くジオでないが。
 - 不満はそこにある。全体のテーマはあるが、それが語られていない。
- ・博物館があるのだから協力してもらう必要があるのでは。
 - 現地審査の最終日をお願いした。
 - 現地審査の際、解説は地元のガイドにすべて任されていた。専門家の関与がどの程度あるのかはわからなかった。
- ・博物館の募集するツアーは多いが、効果が出ていないのか。
 - 斎藤館長も熱心ではあるが、既存のベテランガイドの意識をどうジオにむけるかが課題。
- ・科学的な説明は出来ているのか。
 - ある程度は出来ているが、統一的でない。
- ・災害遺構は。
 - 小田原城は訪問した。
- ・協議会のウェブサイトではガイド養成講座をやっているようだが効果がないのか。
 - 全体の品質が保たれていない。
- ・うまく宿題を出せば可能性はあるのでは。
 - ポテンシャルは十分ある。
- ・最初から条件付き合格でも良いのでは。
 - その場合初めての制度になる。
- ・首長の交代で頓挫した経緯があるが、現在はどうか。
 - 協議会自体の体制はできているように見える。

伊豆半島

小泉委員と伊藤委員から現地審査の報告があった

[報告] 全体のストーリーはしっかりしている。資源は多いが、現状では火山に偏りすぎている。地形や植生、鉱山の歴史も取り込むよう要望した。看板の整備はこれからで、十分に予算をかけて設置すると説明があった。教育研究活動は活発で、静岡大の小山さんが全面的にバックアップしている。地元の熱意も上がっている。若い研究員が事務局にいる。組織・範囲が大きいため連携は大変だが、ガイドの拠点同士や公認ガイドの交流もある。まだ拠点施設がないのが問題である。しかし、2年以内に整備するとのこと。ガイドのレベルが高い。意識の共有もある。既にある説明板はよく出

来ている。自然災害は多いので、防災は意識が高い。ただし、観光客の防災は課題である。

[コメント・質疑応答]

・火山以外のジオサイトはどうか。

→それは弱いですが、海岸植生など見どころになりそうなところを紹介した。トカゲも伊豆半島は本州と種類が違うので、そういったものも素材としてある。

・全体のテーマは魅力的で、ジオサイトもたくさんある。

→「海の中もジオ」と地元の漁協の方が言っていた。この視点はおもしろい。

→下田市長は海のこともしっかりした(釣・海藻)。

5 地域の認定の可否について各委員が意見を述べ、それぞれに宿題を課して 5 地域とも認定することで合意した。その上で、認定後に残された課題が順調に改善されているかをどのようにチェックするかについて話し合われた。再審査まで 4 年間放置するのは良くなく、継続して課された宿題をチェックする体制が必要であるとの意見がだされた。また、今年、認定されたジオパークに課した宿題に対する改善レポートの提出があったが、今後の計画ばかりで、改善点が明確でないものが多く、改善レポートで報告していただく内容を再整理する必要があることが事務局から報告された。認定された地域のフォローアップについて JGC と JGN で協力して進めることが提案された。これらの議論をふまえて、現地審査で聞いているそれぞれの課題を、現地審査員が宿題としてまとめて、事務局から統一的に送ることになった。またその改善点の報告を定期的に行ってもらおう、という提案があった。

2-2. 世界ジオパーク推薦の可否の審査 (15:30-16:00)

阿蘇地域の世界ジオパーク推薦の可否の審査が行われた。佃委員と尾池委員長から現地審査の報告があった。

[報告] 火山、特にカルデラを中心としたジオパーク。エコツーリズム、グリーンツーリズムはできているが、ジオパークとしての活動が不十分である。看板の内容も専門的すぎる。教育・研修等は活発であり。デザインセンターが事務局で、体制は良く出来ており資金能力もある。その裏付けでイベント活動は数多くこなしてきた。国際的には 20 万人/年の外国人が来る。豪雨災害からは復旧中。ジオパークとしては土地利用の観点で(この災害を) どう位置づけるかは宿題とした。観光客は多いが、地域コミュニティが衰退しているのでジオパークに期待している。問題はあるが、ジオパークとしての充実が増えて上り調子である。

[コメント・質疑応答]

・5 月に見に行ったときはようやくジオパークが始まったところという印象。上り調子はどの程度か。

また、阿蘇ジオパークの売りは、どのような点か。

→カルデラの内外で生活がある。それをテーマとする意識はあるが、ガイドの説明は総じて期待外れ。トロッコ列車のガイドは良かった。子供たちの参加もあった。

→ジオパークを意識していない列車のガイドが一番面白かったというのが問題。

・GGN でカルデラの地域はあるのか。

→世界の収束帯におけるカルデラはない。また、豪雨災害はカルデラと暮らしのひとつの実例で

ある。

- エコツーリズムが盛んだが、どこまでジオツーリズムとなっているのか。
→上へ重ねている印象。
- 水準は低い。1年で伸びるのを期待するには、地域に人材がいるのかも疑問。箱根も同じ。現状では、GGNに申請しても落とされるのは明白。
→10人いる事務局のなかで、若い人がまだ前面に出てきていない。既に観光地として確立しているのが最大の問題で、ジオがうまく生かされていない。
→確立した観光地として既存のそれぞれの部署が機能しているのはわかる。それぞれがジオを理解しながら参加している様子は伺えた。
- 事務局であるデザインセンターの局長が交代するらしいが、この時期に交代するのは審査にあたる影響が大きいのでは。
- 審査にだしてGGNでリジェクトされた場合は、再審査にあたっての影響は。
→再提出は出来るが、当然印象は落ち、ハードルが上がる。
- 隠岐の課題と重なる部分が多いが、阿蘇では同様の課題を克服できそうなのか。
→植生などを中心とした、既存のツーリズムとの統合は進んでいない。
- 中岳の噴火と植生は実は深い関係がある。そこまでストーリーに含められれば、多少はジオとの繋がりが良くなるはずだが。
→火山博物館ではガイドのたまり場を設けた。駅前にも拠点を整備していた。
→形は出来た。誰がリードするのかという人の問題が大きい。
- エコツーリズムのガイドは、動植物には関心があるがジオに拒絶反応がある傾向がある。誰に指導してもらうのが良いのかが、ひとつポイントでは。委員会からもアドバイスしては。
→他のジオパークのガイドに学ぶのが最も良いと思われる。これまで交流が乏しかった。
→ガイドの説明は、学問的すぎると面白味に乏しいので工夫が必要。
- 阿蘇の学術部会は年配のメンバーからなっており、若い力に乏しい。引っ張ってゆく人材に乏しいと感じている。また、隠岐の宿題は阿蘇にも当てはまる課題。ジオパークとして何があるかが重要。
- 判断が難しい。隠岐の場合は1年で本当によく頑張った。それが阿蘇に望めるか。
- 内向きにジオパークを説明している段階。
- 火山博物館との関係はどうなっているのか。
→現地審査時点では特別展をやっていた。
→その特別展はジオパークとは何かを地元の人に見せる展示会であった。GGN申請の直前に行う内容でないと感じた。若手はやる気にはなっているが指導者の問題。
- 事務局長が申請のタイミングで交代するとなると難しいのでは。
- 宿題前提で通してはどうか。
- このままでは、12月までに十分な申請書が書けないと思う。今年出して落とされるよりも、保留にして、来年まで十分準備して出したほうが良いのは。隠岐も昨年12月時点の申請書で保留になった。今の段階で阿蘇が申請書を出すのは危険。
- 阿蘇は2年前に却下した。それからストーリーは出来てきたが、まだ中身は伴っていない。2年前

は看板、ガイドも問題があった。火山博物館が中心になるべきとの意志があったはず。しかし、それが実現していない。1年待ってみてはどうか。

- ・十分資格は出来てきているが、1年間予備校にいてはどうか。今年度はGGNへの推薦を保留することとしたい。

3. 認定結果とりまとめ (16:19-16:30)

以上の議論をふまえて認定結果をとりまとめ、プレス発表資料を作成した。

4. 再審査について・その他 (16:30-17:00)

事務局から事前に委員から提出された再認定審査日程調整票を基に、各委員の派遣先の提案がなされたのち、以下のような議論があった。

- ・審査の際に行ったことのない委員が再認定審査に行くことにしていたが、今後のことを考えると、地域の担当を決めた方が良いのでは。また、事務局は他のジオパークから行ってもらうてはどうか。ジオパークの方に書類を見ていただくことも、勉強のひとつ。
- ・再審査を通じてジオパーク間の相互乗り入れを進めるのも悪くない。
- ・JGNとしてはどうか。
→GGNの地域であれば問題ないと思う。
- ・品質を上げてゆくのもJGNで意識して欲しい。
- ・目標は良い会員(JGN)の確保であろう。
→今までは、学術的な審査はしてもらっていたが、活動・運営の審査が不十分という印象がある。JGNが今年度、各ジオパークの活動・運営状況について調査をかけるので、11月頃に結果が出ればJGCに提供したい。
- ・可能ならば現地審査に派遣する委員は二人にしては。
→二人にすると日程調整が困難になる。
- ・まずは一人決めておいて、可能な委員は独自に参加しては。
- ・6月に決めた現地審査項目ではGGNもJGNでも共通にしていた。GGNの3地域はGGNの認定の際に宿題にされていたことを聞いてくる必要がある。
- ・書類で気になるところがあれば担当の委員に事前に伝えることにして、委員の派遣は一人ではどうか。
- ・GGNのコメントへの答えが必須だが、事前に提出してもらった書類ではそうになっていない。
→GGNへのコメントの答えは聞いてこななければいけない。
- ・JGNの持っている調査データをJGNから提供してもらえるか。
→調査は運営組織・体制・根拠を問いたす予定。たとえば拠点や職員について数字で答える形で、かつ毎年行いたい。いずれは個別にガイド等にも調査したい。それを提供することは可能である。
- ・JGNとしては 厳しい再審査を期待している。
- ・GGNの再審査基準では1/3がネットワークへの寄与。日本では意識が乏しいのでは。全体に再認識をお願いしたい。

- ・再審査時のポイントは事務局でまとめておいて欲しい。

以上の議論により、国内での再審査にあたって、委員会として十分なアドバイスができる人員で再審査に行くべきとの結論になり、事務局案を見直すことになった。また、各ジオパークでの人材育成を図るため、世界ジオパークに認定された地域のジオパーク関係者を再審査に同行させる方向で調整することになった。また、次回委員会は1月28日開催で調整することとなった。

17:00 閉会